

説教 『 知恵が呼びかけているではないか 』

小河信一 牧師

箴言 8章1節～36節

箴言8:1——

知恵が呼びかけ

英知が声をあげているではないか。

いったい、「知恵」とは何でしょうか。結論的に言えば、その答えは単純です。もちろん、そこには、深い真理と豊かな恵みが宿っている、そのような「知恵」です。

コリントの信徒への手紙 — 1:23-24——

²³ わたしたちは、十字架につけられたキリストを宣べ伝えています。すなわち、ユダヤ人にはつまずかせるもの、異邦人には愚かなものですが、²⁴ ユダヤ人であろうがギリシア人であろうが、召された者には、神の力、神の知恵であるキリストを宣べ伝えているのです。

キリストが、私たちにとって、神の「知恵」であるとは、明快な答えです（他にコロサイ2:3参照）。父なる神が、御子キリストを遣わして、十字架につけられ、それによって、私たちの罪を滅ぼし、悔い改める者に永遠の命を与えてくださった、そこに神の「知恵」があらわされていると言うのです。そして、その「知恵であるキリスト」を前にしてはじめて、私たちは自分の知恵や力を誇る事がなくなります（Iコリント1:29）。

ただ、ここで、一つの疑問が湧いて来ないでしょうか。キリストにおいて、片や、神の「知恵」があらわされているというのと、片や、神の「愛」があらわされているというのと、どう違うのでしょうか。

キリストは神の「知恵」であり「愛」であるというのは、教義学的に正統ですが、そこへ至る経緯を、旧約聖書の「知恵」の書、箴言によってたどることにしましょう。

まず、旧約全体において、知恵文学でいう「知恵」の特徴を要約してみましよう。芥川龍之介の「しゅじゅ侏儒の言葉」など、日本の文学に記されている箴言や警句とも若干、似ている部分があります。

旧約の「知恵」の特徴——

- 人生について、慎重かつ堅実に考える。
- 安定した人生を送るために、秩序を受け入れようとする。

- ・人間の行為について、踏み越えてはならない境界を定める。
- ・確固とした共同体の一致と秩序に関して、基本的に保守的である。
- ・教示的判断について、ある程度可変性がある。絶対的な結論を出さない。新しい経験に直面して、改訂する用意がある。
- ・人生は豊かであり複雑であって、それほど簡単に把握できないことを認めている。
- ・共同体の責任を担うべく、子どもを教育し、社会に適合させる。

(W.ブルッゲマン)

箴言8章では、12節に「慎重さ」について、27節と29節に「境界を定める」ことについて、また34節に子どもへの教育（聖句を記して容器に入れ、門柱に取り付ける：申命記6:4-9）についてそれぞれ言及しています。

このように列挙されると、私たちは「知恵」を得ることに、もっと熱心にならなければと気付かされます。しかしながら、知識や知恵といえ、すぐに私たちの連想は、学問のための知識へ、あるいは、その場をうまく切り抜ける知恵へと向かいます。

確かに、知識や知恵は、受験など学問において、また、未知の世界の探究において、役立ちます。しかし、より根本的に言うならば、私たちが知恵に耳を傾け、知恵を求めなければならないのは、「そこに生と死がかかっている」（フォン ラート）からです。実際に、箴言8章の終わりにおいて、知恵に従うか否かによって、人が「命を見いだす」か、それとも、人が「死を愛し」「魂をそこなう」か、道の分かれると警告されています。

それでは、知恵の中の知恵、まっすぐに神の知恵であるキリストに通じている箴言8章を最初から読みましょう。

箴言8:1-3――

¹ 知恵が呼びかけ

英知が声をあげているではないか。

² 高い所に登り、道のほとり、四つ角に立ち

³ 城門の傍ら、町の入り口

城門の通路で呼ばわっている。

今、「知恵が呼びかけ」ていますから、当然私たちには、知恵を傾聴する姿勢（箴言8:32）が求められています。「だれでも、聞くのに早く、話すのに遅く、また怒るのに遅いようにしなさい」（ヤコブ1:19）との勧めの通り、どのように知恵と関わるか、本当に聞いているか、自分を吟味することが第一です。

ここで知恵は、「四つ角に立ち」、すべての人々に対し、路傍伝道しています。神殿や会堂で呼びかけているのではありません。知恵は、自ら外に出て行って、人々が日常生活を過ごしている場で、道行く人々に呼びかけています。その道のほとりは、まさに世俗の世界であるゆえに、知恵のみならず、遊女（よその女）が「意志の弱そうな若者」（箴言7:7）を誘っています（同上7:10-23）。ちまたの雑踏には、聞き従うべき声と聞き従うべきでない声が入り交じっています。それ故に、まことの知恵が声高く呼びかけているのです。

マタイ福音書22:9-10 「婚宴」のたとえ 王が家来たちに言った——

⁹ 「だから、町の大通りに出て、見かけた者はだれでも婚宴に連れて来なさい。」

¹⁰ そこで、家来たちは通りに出て行き、見かけた人は善人も悪人も皆集めて来たので、婚宴は客でいっぱいになった。

通りに出て行き、雑踏の中で声をあげるといふ知恵の働きを、主イエスはその公生涯において実践されました。主イエスはガリラヤ湖のほとりを歩いておられる時に、ペトロら漁師を弟子として従わせられました（マタイ4:18-22）。また、主イエスは通りがかりに、徴税人マタイを「わたしについて来なさい」と呼び寄せられました（マタイ9:9-13）。「見かけた人は善人も悪人も皆集めて来た」というのは、主イエスご自身でした。

「わたしは道である」（ヨハネ14:6）というお方、主イエスに出会った人々は、そこで自分の人生行路について問い直しました。その際、自分の生き方をつまびらかにする「知恵」を、主イエスから受け取った人は幸いでした（L.A.スナイデルス）。なぜならば、主イエスこそが、罪と死を乗り越える生き方を指し示されたからです。

私たちは、自分の生き方・死に方を決定づける「知恵」を捜し求めなければなりません。

箴言8:17——

わたしを愛する人をわたしも愛し

わたしを捜し求める人はわたしを見いだす。

※箴言では、神の知恵（女性形）が「わたし」として擬人化されています。

箴言8:35——

わたしを見いだす者は命を見いだし

主に喜び迎えていただくことができる。

ヤコブの手紙1:5——

神に願いなさい。そうすれば、与えられます。

まず、知恵に耳を傾けて、聞き従い、まことの知恵を見いだします。そしてさらに、

その知恵が自分のうちに持続し、その欠けが補われるように願い求めるのです。

「わたしの与える実り」・「わたしのもたらす収穫」（箴言8:19）とある通り、すぐに結果は出ないかもしれません。しかし、忍耐強く待てば、やがて実を結ぶ時、収穫の 때가到来します。「金、純金、精選された銀」にまさるものが、私たちに本当の命を与える知恵です。

箴言8:22——

主は、その道の初めにわたしを造られた。

いにしへの御業になお、先立って。

箴言は、知恵が私たちに教えはじめた、その「初め」を天地創造の時にさかのぼらせています。創造の時から、知恵は、神と共にあり、その時から知恵は人類の救いのために、神と共に働き続けています。この箴言8:22は、「初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった」（ヨハネ1:1）という永遠の主なるキリスト証言と響き合って不朽のものとなりました。

ただし、箴言では「初めにわたし（知恵）を造られた」と描かれていますが、言（ことば）（ロゴス）なるイエス・キリストは、父なる神に「造られた」（創造された）のではなく、「初めに……あった」、すなわち、父なる神と共にいまし給うたお方です。神に造られたすべてのもの、万物の土台は、キリストなのです。

箴言8:30-31——

³⁰ 御もとにあって、わたしは巧みな者となり

日々、主を楽しませる者となって

絶えず主の御前で樂を奏し

³¹ 主の造られたこの地上の人々と共に樂を奏し

人の子らと共に楽しむ。

知識や知恵を習得すると言えば、試験などの刻苦勉励と重なり合って、「ツライ」思いが先立ちます。ところが、上の2節では、「楽しみ / 喜び」と「樂を奏する / 戯れる / 遊ぶ / 笑う」という用語が反復されています。神の御前にあって、知恵（わたし）は楽しみ、また、地上の人々と一緒に樂を奏して遊びます。

人が「命を見いだす」ように、知恵が導くなら、それは何よりも大きな喜びです。知恵は、悲嘆に沈んでいる者の口に、神への賛美を与えます。

ラテン語の格言 Vacare Deo ヴァカーレ デオ は、「神に対して虚しくなれ」とも「神のために余暇（vacation）をつくれ」とも訳せる深い教えです。私たちが多忙な時ではなく、憩っている時に、神からの知恵が私たちの心に入って来るとするのは、真実です。

ヤコブの手紙1:5――

あなたがたの中で知恵の欠けている人がいれば、だれにでも惜しみなくとがめだてしないでお与えになる神に願いなさい。そうすれば、与えられます。

ヤコブの手紙1:5は明確に、旧約の知恵文学の伝統が新約聖書へと至っていることを証言しています。この一節において、神の知恵であるキリストと私たちの関係を捉えることにしましょう。

この一節には、人間とは、また神とは、ということが諺のように一括されています。

人間は――

知恵の欠けている者である。

神は――

だれにでも惜しみなくとがめだてしないでお与えになる。

人間とは、「僕は主人にまさらず」（ヨハネ13:16）との主イエスの言葉の通り、知恵の教師、イエス・キリストに向き合うならば、誰しも「知恵の欠けている」者です。そして、へりくだって自分の欠けや貧しさを認めるとき、神の神たることが見いだされます。

神とは、私たちに惜しみなく与える神であり、私たちをとがめだてしないで与える神であります。

神が「惜しみなく」ということで、私たちが第一に想起すべきは、日毎の糧や自分の賜物などではなく（ヘブライ13:9、詩編4:8）、神が私たち人間の罪を贖うために、この世に遣わしてくださった御子キリストの出来事です。

ローマの信徒への手紙8:32――

わたしたちすべてのために、その御子をさえ惜しまず死に渡された方は、御子と一緒にすべてのものをわたしたちに賜らないはすがありませんか。

父なる神は、御子キリストによって、まことに「惜しみなく」、気前よく、無償で十字架の業を成し遂げられました。キリストによる十字架の死と復活の勝利によって、私たちの人生の欠けや貧しさは完全に満たされました。主の十字架にこそ、私たちの生と死がかかっていることが分かりました。

最後に、私たちをとがめだてしないで与える神に、私たちは向き合わねばなりません。「わたしは神にとがめだてされなかった」または「わたしは神から非難されなかった」で終わりではありません。そのような神の寛大さ、すなわち、御子の命をかけて私たちの罪を赦してくださった偉大さに対する、心からの応答として、神を賛美し、神に感謝します。そして私たちは、人の人生の交錯する四つ辻で、「キリスト・

イエスへの信仰を通して救いに導く知恵」(Ⅱテモテ3:15)を告げ知らせるのです。

神の愛であり知恵であるお方、主イエス・キリストは、世の人々がまことの愛、まことの知恵に飢え渴いていることをご存知です。私たちは、礼拝の中で赦しの愛に満たされ、そして、教会の外で救いに導く知恵を語り伝えます。偽りの知恵の錯綜する世の中で、まことの知恵は、人の歩むべき道を照らし出します。そうして、闇路から大勢の人々が立ち帰り、教会に招き入れられて、まことの愛を知り、新しい歩みを始めます。